

子どもの生きがい

榎田 正子

「生きがい」ということは、私にとって何かとても重い感じのすることばで、これを厳密な意味でとらえて考えるのはまことにむずかしい。ここでは「子どもの生き生きとして充実した生活」という具合にことばのニュアンスを少しくずして、この観点から実際の子どもの生活をふり返って考えることを、はじめにおゆるしいただきたい。

さて、子どもたちに生き生きと充実した楽しい生活を送らせたことは、母親として常に強く考えることであるが、そう思いつつ四歳と二歳半の二人の子どもたちと日々生活を共にしているうちに、最近私はこんなことを感じるようになった。すなわち、子どもたちはそれぞれに「イメージの流れ」とでもいったらよいのであるうか、興味を持ち発達しつつある自己をそこに完全に入れこ

めるようなイメージの連続の上に生活していて、その連続の上に立って活動する場合は実に生き生きと楽しそうに自らを没頭させることができ、しかもその状態が次の新しいイメージを生み出して、ダイナミックに流れを形成して行くが、何らかの影響でそのイメージからはずれると、子どもは充分に活動を楽しむこともできず、またその中で自分自身で発展させて行くこともできにくいということ、である。

このことを、M郎（四歳）とT子（二歳）の具体的な記録を通じて考えてみる。

☆ ☆ ☆ ☆

M郎「おはようございませす」と起きてくるなり「Mの汽車ある？」といいながらレゴの箱をあける。前日レゴで母親と合作した汽車がこわれずに入っているのを見つけて目を輝かせ、父親に報告する。

朝食後もM郎はその汽車を「お山の方走る汽車だよ」などと言つて動かしてみたり、更にレゴを組み立てて連結車を作ったりする活動に没頭する。

ひと足おくれで起きてきたT子はベジャマのまままっさきにおもちゃ箱に行き、あき箱を見つけてはさみで切り始める。（昨夜寝る直前にしていた活動である）

— 中略 —

T子の朝食が終わるのを待ちかねたように、M郎は
「Tちゃんお山に行きましようか」と誘う。

T子同意、M郎は早速ソファを汽車に見立てて積木等で運転席
を作り、

「お山行きの汽車が発車しますよお」

T子もその声に促されてソファに乗り込むが、

「あ、お弁当持って来なくちゃ」と言ってソファからおりる。

M郎「うん、お弁当持って行こう」

T子とM郎はそれぞれ自分で考えた材料と方法でお弁当作りを
する。(T子は、ビニールの袋に細いおもちゃを入れ、M郎はラン
チケースに二種類の薄型積木をサンドイッチ風に組み合わせて詰
める)

—中略—

その後M郎とT子の間に一、二度の衝突がありながらも子ども
たちの発想が次々と続き、ソファの汽車にテーブルや椅子、小型
マットレスなどを組み合わせて飛行機にしたり、橋(トンネル)
に見立てたり、トランポリンのまねをしたりしながらいかにも楽
しそうにあそびはスムーズに展開して行く。

十時過ぎ、子どもの時間があるので母親がテレビのスイッチを
入れ、子どもたちは三十分間それを熱心に見る。

再びテレビを消した後、子どもたちのあそびは元のトランポリ

ンごっこには戻らず、ふたり別々に室内をブラブラ歩きまわって
おもちゃをいじったり組み合わせパズルに取り組んだりするが、
いずれも気が入らないようすで活動にもまとまりが無い。

(約四十分間)

ビニール袋に入って床にころがっていたおもちゃをT子が見つ

け

「あ、お弁当食べよう」と言う。

それがきっかけでM郎も合流してごちそうごっこが始まる。母

親も途中から呼ばれて参加する。

十一時半過ぎ、

母「じゃあ今度はママがコックさんになるわね」

子どもたち「いいよ」

母立ち上がって台所に行く。

M郎「ごちそうこれじゃないの?」とおもちゃを示す。

母「ママのはね、すばらしいの。本当のごちそうなの。間もな
く子どもレストランを開きまます、いい?」

子どもたち「うん!」といつもよりオクターブも高い声で同意

を示し歓声をあげる。

—中略—

昼食時、M郎とT子はすっかりレストランのお客さんになつた
つもりで、母に、

「ボーイさん、牛乳お願いします」などといいながら楽しそうに食事をしている。

母もそれに対応した態度で食事を進めるが、突然牛乳をこぼしそうになったT子に、

「あ、Tちゃん、気をつけて」と普段の会話の調子で注意する。

その途端、T子はブツとぶくれ、涙声になって、

「Tちゃんじゃない！ お客さまでしょ、お客さまって言わなきゃだめ！」

母あわてて「あ、そうだったわね、お客様どうも失礼しました。どうぞお気をおつけ下さい」と言い直す、

T子再びきげんを直して食べ続ける。

—中略—

以上はM郎とT子のある午前中の大まかな活動記録である。ここにも見られる通り、子どもたちの一日は前日の活動の続きでスムーズに始まり、その後、形の上では汽車あそび↓お山行き↓お弁当詰めあそび……と目まぐるしく変化するが、子どもの中に流れているイメージは連続的に展開していることが、ことばのしぼしから理解される。そしてM郎とT子はその間、実に楽しそうに活動に熱中しているのである。ところがたまたまわずか三分ながらテレビ番組に熱中することで、そのイメージがと切れると、再び流れに戻るまでの間、活動は断片的で発展的ではなく、

子どもたちのようすも充分楽しんでいるとは見えない。(すぐに全く新しいイメージが生まれたり元のあそびに戻る場合もある) また子どもたちの発想だけでなく母親がそのイメージに合流することにより、子どもたちにより大きな発展やよこびをもたらし、ことも可能であるし、逆に流れを無視した態度が子どもに大きなとまどいを与えることもわかる。

このような日々の経験を通して、子どもの「イメージの流れ」に注目してみると、生活の中のいろいろなことが関連的に考えられる。たとえば、遊びが発展して来ると次々と道具やおもちゃが出され、部屋いっぱいにかかってしまうことが多いが、その「ちらかり」が新しいイメージを生み出したり、とだえた流れが再開する刺激になったりするという事実から、大人の感覚で整理を促すことの功罪や、また次への発展の余地を残した片付けのあり方を子どもと共に創り出して行く必要性などである。

しかしイメージの流れの上で自らのすべてを投入し生き生きと活動している子ども、動いている子ども、発達している子どもと対するためには、母親自身決して止まっていたはならないということである。子どものイメージをよく理解し、子どもと共に自ら動くことは実に快いことであり、それがもししたら母親の生きがいなのかもしれないとも思うのである。